

工科総掛かりで昼夜兼行の製作を行い、生徒も先輩たちとともに手伝って製作の実施勉強をした。

⑬ 大村西崖『密教発達志』の帝国学士院賞受賞

本校東洋美術史担当教授にして生徒監の大村西崖は本務の傍ら東洋古美術研究書の執筆および出版事業につとめ、大正四年には『支那美術史彫塑篇』（仏書刊行会図像部発行）を著し、次いで同七年には『密教発達志』（同前）を著した。後者は長年に亙る密教研究によりその蘊蓄を傾けて完成した大著で、出版を機に西崖は本校内外の希望者を集めて翌八年一月八日以降一年間に亙り、第一講義室で「密教美術史」の特別講演を行なった。次いで同九年五月三十日、西崖は本書により帝国学士院賞を受賞した。



帝国学士院賞を受賞した大村西崖

『東京美術学校校友会月報』第十九巻第三号にはこのことが大きく採り上げられ、まず大礼服姿の西崖の写真が口絵に掲げられ、「授賞審査要旨」が掲載された。次いで西崖の漢文「拙著蒙學士院選奨諸友投簡寄頌或張宴賀之乃賦七言廿韻以敘懷兼言謝」の一篇が載せられ、さらに「芸苑叢報」の欄には授賞式と祝賀会の模様が決のよう記された。

○大村教授の學士院賞受賞 既

記の如く帝國士學院本年度第一部の學士院賞は本校の大村教授に擬せられたるが、愈々五月三日の帝國學士院部會に於て卷頭記載の要旨により授賞と決定し（五月十日官報）五月三十日午前十時より本校大講堂に於て朝野の高官名士會員參列の上、盛大なる授賞式を舉行され、席上文學博士村上專精氏は授賞の理由を説明され、大村教授は賞牌賞記及金壹千圓を滿堂の拍手裡に受領されり、教授は本校第一回の卒業生にして、博士中の博士と稱せらるゝ極少數の學者が受く可き名譽を荷はれたるは母校同窓一同の最も欣喜に堪へざる所なり。

○同上祝賀會 授賞式の夕午後五時より、豫ねて正木〔直彦〕校長、白井〔雨山〕、白濱〔徵〕、結城〔素明〕諸教授鈴川〔信一〕講師溝口禎次郎氏其他朝野の名士學者の發起に依る祝賀會は上野精養軒に於て舉行されたり、定刻過ぎ、來會者百六十名は階下大食堂に集合し開宴し、デザート、コースに入るや、發起人側を代表して正木校長祝辭を述べられ、次で大村教授の答辭あり、次ぎに特に上京參列せられたる權田雷斧師は宗教家の立場より教授を激賞し、次に又玄畫社を代表して奥宮正治氏祝辭を述べられ續いて赤羽雪邦氏等の祝辭あり、未曾有の盛會を極めたり。

⑭ 校友会文芸部発足

明治四十年代から大正はじめにかけて活発な活動を続けた校友会文学部（第二卷³⁹³、³⁹⁶頁参照）は次第に衰えたが、大正九年三月に再び文芸愛好家有志が集まり、文芸部として体制を立て直した。そこで定められた規則は次のようなものであった。